

# 先輩が後輩を支援する「エルダー活動」を基礎ゼミナールに導入した試み

著者	岸田 泰子, 荒木 亜紀, 西田 志穂, ケニヨン 充子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	9
ページ	51-56
発行年	2022-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1087/00003491/">http://id.nii.ac.jp/1087/00003491/</a>



# 先輩が後輩を支援する「エルダー活動」を 基礎ゼミナールに導入した試み

## The Introduction of “The Elder Activity” in which Seniors Support Juniors in Basic Seminars

岸田 泰子      荒木 亜紀      西田 志穂      ケニヨン 充子  
Yasuko Kishida      Aki Araki      Shiho Nishida      Michiko Kenyon

キーワード：エルダー活動、先輩が後輩を支援する、看護学生

key words : elder activity, seniors support juniors, nursing student

### 要 旨

看護学部において、先輩である2年生が後輩である新入生を支援する「エルダー活動」を、1年前期に履修する科目「基礎ゼミナール」において導入し、その実践と期待される効果、今後の構想を報告した。本活動の目的は、新入生が早期に大学生活に慣れ、有意義な学生生活を送れるように支援すること、新入生への学習支援および在学生のリーダーシップ向上の一方法として導入し、双方の学力向上を目指すこと、共立女子大学看護学部の特色のひとつとなるような仕組みづくりを目指すこと、である。本活動の効果は、エルダー、学習者双方のほかに、コーディネートする教員、学部にとってももたらされるものと期待される。課題として、エルダーの雇用、募集に関すること、エルダーの質の担保のための方法の整備、活動のルール作り、などが考えられた。

### I はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年度のみならず、2021年度初頭は新入生にとって、様々な制約を強いられる大学生活の始まりとなった。新入生たちは当たり前キャンパスで過ごすはずの学生生活を奪われ、友人を作り語らうこともできない日々が続き、教育環境は大きく様変わりしていった。

一方で著者は、感染拡大によらず、アルバイトを行っている学生が9割近くを占めるという現状である「アルバイトの日常化」<sup>1)</sup>によって、サークルやクラブに所属しない学生たちの学年の枠を超えた関係の希薄化が進行していることを日々感

じていた。しかし、大学における教授方法として先輩後輩という関係を利用して功を奏するものが散見される。たとえば、大阪産業大学<sup>2)</sup>や関西学院大学<sup>3)</sup>のエルダー制のような上級生が下級生の学習面、生活面でのサポートを実施するというもので、これらは各大学のホームページに記載されているとおり、大学のPR活動にも一役買っている。そればかりか、学生自身が学生を育てることによって、教えられる側、教える側双方が共に育つ<sup>2)</sup>という利点もある。また、看護基礎教育において、4年生が3年生に指導的に関わり、相互に学び合う屋根瓦式教育についての報告<sup>4) 5)</sup>が散見される。看護教育の中では、1科目に限らず、システマテックな取り組みとして学部全体で複数科

目において下級生を支援する取り組みも報告されている<sup>6)</sup>。さらに総合大学の中には、高大連携を意識した取り組みとして、入学前の入学決定者に対して在学生在がフォローする支援体制も見られる<sup>7)</sup>。

我々は、冒頭で述べたようなコロナ禍において新入生らの大学生活が過酷なスタートとなった現状で、科目の学習支援のみならず、自らがコロナ禍での大学生活の体験を下級生に伝え、生活面、精神面での支援を含めて、支える側の上級生（以下、エルダー）が下級生をサポートする仕組みを構築することにより、新入生らの大学生活全般を支えることができるのではないかと考えた。そして、コロナ禍の今だからこそ、この仕組みを早急に整えることが新入生の支援のために有益ではないか、また、エルダーとなる上級生にとっても教育力の向上や本学の副専攻でもあるリーダーシップ向上に役立ち、双方向性の影響をもたらす活動となるであろうと考えた。また、本学の副専攻の目標として掲げているリーダーシップを養うための教養教育は「リーダーというポジションではなく、メンバーそれぞれがチームの成果を生み出すために、皆と目標を共有し、率先して動き、人を巻き込み助け合うことで、チームにポジティブな影響を与えていく力を発揮すること」であり、双方向に影響をもたらすであろう本エルダー活動の意義と合致するものである。よって、このような方法を本学部独自の方法としてアレンジして取り入れることにより、特色ある学部運営を目指すことはできないだろうか、とも考え、有志の教員4名で構想を練り、2021年度前期より、看護学部において、2年生が1年生をサポートする仕組みづくりに着手することとした。すなわち、本活動の目的は次の3点である。

1. 新入生が早期に大学生活に慣れ、有意義な学生生活を送れるように支援する。
2. 新入生への学習支援および在学生のリーダーシップ向上の一方法として導入し、双方の学力向上を目指す。
3. 共立女子大学看護学部の特色のひとつとなるような仕組みづくりを目指す。

最終的なエルダー活動の目的は上述のとおりであるが、本報では特に入学後間もない時期の新入生の科目の中で、目的とした1と3を実践すべく

試行したので、これを振り返りながら、今後の構想と展望について考えてみたい。

## Ⅱ 2021年度前期 「基礎ゼミナール」での試行的導入

### 1. 準備段階

エルダー活動に賛同した教員4名がコーディネーターとして本活動の中心となって計画を練り、発足から1か月ほどの間に3回の会議を経てエルダー募集に至った。看護学部2年生を対象としてエルダーを募集したところ9名の学生から応募があった。エルダーとなる2年生とコーディネーター教員4名の合同会議は開始前に2時間程度、全員出席のもとで行い、試行的導入に至った。発案から導入開始までの期間は非常に短く、決して十分な準備状況とはいえないながらのスタートとなったため、エルダー導入の授業前後のエルダーとの打ち合わせには時間を割き、コーディネーター教員はエルダーとの意思疎通や疑問点の解消を図ることを心掛けた。

### 2. 「基礎ゼミナール」の概要

「基礎ゼミナール」（以下、基礎ゼミ）は本学教養科目の1つであり、1年次前期1単位14コマ（1コマ100分授業）で開講する全学部学生の必修科目である。その概要は表1のとおりである。

本科目は全学教養科目であるため、全学共通教育委員会によってガイドラインが作成され、これに則って担当教員が授業を進行する。1クラスの履修者数は30名以下で、各学部・学科ごとにクラス編成し、専任教員が担当する。また本科目は高校から大学への学修への移行を目指す導入教育と位置付けられており、学生が主体的に学ぶことができるような双方向性の授業形態が推奨されている。評価については全学委員会が作成したルーブリックを用いるように示されている。

また、看護学部における基礎ゼミナールでは1学年100名定員を4クラスに分割し、4名の専任教員が担当している。なお看護学部は各学年5名の教員が担任となる担任制度をもち、1年生の担任の少なくとも1名がこの科目を担当するよう割り当てられている。今年度は、1年生担任のうち2名が本科目を担当していたことから、この2名の教員の2クラスにおいて試行的にエルダー導入

表1 基礎ゼミナールの概要

1. 科目概要 大学における「学修」の意味を学び、大学生生活を豊かにする人間関係を構築しながら、授業に臨む環境をつくる。ひとりひとりの学生が、学園の歴史と人材養成像を知り、大学での「学修」の指針を理解し、将来の進路等を見据えたうえで、目的意識・問題意識をもって学修目標と学修計画をたて、学生生活を進めることができるようになる。具体的には文献検索、資料収集、学内システムの活用など、大学で「学修」するために必要な学修技法を実践的に修得し、それをもとに得た成果を発表する作業を課することによって、主体的な学修姿勢を身につける。
2. 到達目標 ① 大学における「学修」の意味を理解し、大学生として、そして共立生として知っておくべきこと、自覚しておくべきことなど、学生生活に関する心構えやルールについて学び、ルールに基づいて行動できるようになる。 ② 自らのキャリアを見据え、有意義で創造的な大学生活を送るための学修計画を自ら立てられるようになる。 ③ 図書館や学内システムの利用方法、演習、実験を行うための基礎的知識など、大学で学ぶための基本的な学修技法を身に付け、活用できるようになる。

表2 基礎ゼミナール授業計画

回	月	日	曜日	時限	講義内容	授業方法	エルダー導入の講
1	4	14	水	1	科目ガイダンス 共立女子大学キャンパス内探索	対面	
2	4	21	水	1	自己紹介 kyonet 使用方法 キャリアデザイン1	対面	
3	4	28	水	1	大学で学ぶということ	ハイフレックス型	
4	5	12	水	1	大学生活におけるルールとマナー	対面	エルダー
5	5	19	水	1	大学生活とメンタルヘルス	ハイフレックス型	エルダー
6	5	26	水	1	レポートの書き方、提出の仕方	ハイフレックス型	
7	6	2	水	1	プレゼンテーションの方法、レジュメの作成	対面	
8	6	9	水	1	課題学習ガイダンス グループワーク①テーマ決定	ハイフレックス型	
9	6	16	水	1	グループワーク②	ハイフレックス型	エルダー
10	6	23	水	1	休講 ホームワーク（課題）		
11	6	30	水	1	グループワーク③発表	対面	エルダー
12	7	7	水	1	レポートの書き方 その2 レポート追加指導	対面	
13	7	14	水	1	リブコモ（図書館／ラーニング・commons）の利用の仕方	対面	
14	7	21	水	1	キャリアデザイン2 まとめ	対面	

を試みることにした。本科目の授業計画は表2のとおりで、実際にエルダーを導入した講は4コマであった。この4コマについては、新入生が先輩からの話を聴くことによって大学生活を有意義に過ごすために有効であろうと考えられる内容の講

と、入学後早期で、クラスメンバーとの関わりがまだ十分でない中でのグループワーク展開およびグループ発表という学習での先輩からの助言を得ることの効果を考えて、選択した講である。

### 3. 授業運営の実際

2021年4月、本学は対面型での授業開始を決定したが、感染拡大の状況により政府は東京都をはじめとする4都道府県に4月25日から5月11日の期間、3回目の緊急事態宣言の発出をした。これに伴い、この期間の本授業形態はハイフレックス型（対面・同期オンラインが提供され、学生が自由に選択することができる授業形態）となり、エルダー活動にも困難をきたした。ハイフレックス型授業時、登校して教室で受講した学生は0名～4名であった。エルダーには大学に出校して参加するよう依頼し、オンラインで受講生と対話したり、ある時は教室で少数の受講生と対話したり、という形態となった。

9名のエルダーは、2グループに分かれて2クラスに入り、テーマに関する助言や自分たちの体験を語り、またグループワークではグループの中に入って、ディスカッションが途切れぬように積極的に現状を把握しながら、先々の話へ展開する、促進されるような関わりをした。エルダーにとっては、昨年度、自分たちが受講した時にはすべてオンラインで展開された授業科目であった。エルダーたちが1年次は、今年度以上にオンライン授業が多く、入学後半年以上も大学校舎に入構していなかった。エルダーたちはオンライン授業での体験を語り、グループワークでは受講生に寄り添う姿が見られた。それは、座席に座る1年生と目線を合わせるよう身をかがめながら、時には黙って進行を見守り、また時には大きく頷きながら話されている内容を理解しようとする姿であった。

グループワークによる成果の発表方法に対する助言は、1年次に学習した内容を総動員して伝授しているようでもあった。エルダー自身が入学直後からコロナ禍での大学生活を経験しているからこそ、後輩たちの不自由さを理解し、献身的にこの活動に参加して、後輩への支援を買って出たのだ、とも考えられた。

一方受講生たちは、入学後、友達を作る間もなく「ハイフレックス型」の授業へ移行し、大学の授業自体にも慣れないことに加えて、ITリテラシーが不十分な状況での授業展開に戸惑いも大きいようであったが、授業後のリアクションペーパー提出（オンライン参加時はウェブシステムを

利用した課題提出）による感想にはエルダーである先輩の登場を素直に喜び、感謝する言葉が数多く記載されていた。

エルダーが関わった授業時には、教室に活気があり、受講生は生き生きと授業に参加していた。グループワークが終了した後には、マスク着用姿で、授業以外の様々な会話を楽しむ受講生とエルダーの姿があった。エルダーに対して、授業参加した日には、エルダー活動を振り返り、感想や質問、相談についてウェブアンケートを用いて自由記載で提出するよう要請した。それには、緊張して授業に参加した様子や、後輩たちが活発に意見交換していたことへの賛辞、自分たちが先輩として役割を果たしたことへの充実感などが記されていた。これらのことから教員は、上級生が下級生をフォローする、というこの仕組みを本学部の授業で導入することへの手ごたえを感じた。

### Ⅲ エルダー活動により期待される効果

上述のようなわれわれの活動から、コーディネーターとして手ごたえは感じているものの、まだ明らかな効果を得ているわけでない。先行文献から、次のような効果が期待される。

#### 1. 学習者（下級生）にとっての効果

学習者すなわち下級生は、もっとも身近なロールモデルを得ることができる<sup>6)</sup>。これまで学習してきた科目を履修した先輩の助言により、科目をイメージしやすくすることができる。また、学生らが臨地実習をイメージしやすくすることは実習に対する不安を軽減することにもつながるものと考える。教員よりも先輩であれば、親しみやすく質問もしやすいし、学生の立場を理解した存在<sup>6)</sup>として、より効果的な学習につながる。

#### 2. エルダー（上級生）にとっての効果

一方、エルダーにとっては、既習した学習内容を下級生に伝えることで復習になるだけでなく、教える側の目線で学習プロセスを体験できる<sup>6)</sup>。そして、また知識を提供することを通して、成功体験を遂行することができる、“教えることができた”といった達成感や自己効力感を高める<sup>4)</sup>こともでき、エルダーの自信にもなり得る。

実際に看護の臨床現場では、20年以上も前からマンツーマン方式で新人を育成するエルダー制が取り入れられており<sup>8)</sup>、学生時代にこのような体験をすることは看護職としての将来にも必ず役立つものとなり、生涯学習能力につながる<sup>6)</sup>ことも期待できる。

### 3. コーディネーター教員、学部にとっての効果

この教育システムは、学習者とエルダーだけでなく、コーディネイトする教員にとっても効果があると考えられる。それは、学習者の目線での授業計画、教育プログラムの開発につながること<sup>6)</sup>、教育者同士が協働し、主たる支援者であるエルダーを通じて学習支援を行うというシステムを構築する<sup>6)</sup>、そのこと自体が大学における知的財産ともなり得ると考えられる。

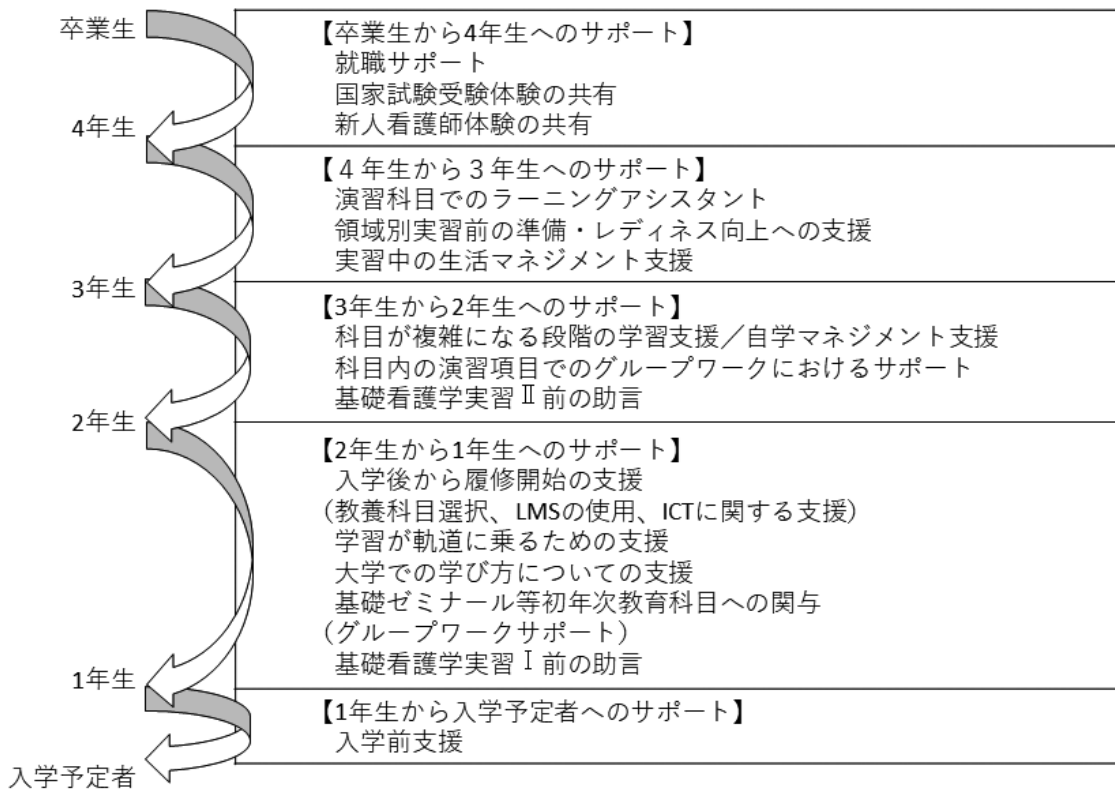
本学の全学共通教育におけるカリキュラムポリシーには、他者と協働し、リーダーシップを発揮するための基礎的な能力の育成がある<sup>9)</sup>。エルダー活動はまさにそれを実現することのできる教育である。またこのような手法を取り入れた教育を根付かせることで、本学部の特色として打ち出すこともできるのではないかと考える。

今後の展開の中で、上述のような効果を期待するが、それをどのように検証するかも考慮したプログラムを作成する必要がある。

## IV 本活動の構想と展望

試行的展開として、入学生が1年前期に履修する科目「基礎ゼミナール」において2年生のエルダーを活用した。決して十分な準備状況を経て導入に至っていないことから、この活動を振り返りつつ、軌道修正する必要がある。しかし現段階においては、本エルダー活動の今後の構想として、各学年が直下の学年もしくは入学予定者までもサポートできるような仕組みができればと考えている。

すなわち、図の左端に矢印で示したように、1年生は入学予定者となる高校生たちを入学前から大学生活をイメージできるような入学前支援を提供する。2年生は、入学後の1年生に対して、履修開始の支援、たとえば教養科目の選択や、LMS (Learning Management System) の使用やICTに関する支援をはじめとして、1年生が大学生活を有意義に過ごし、大学教育に適応できるための支援を提供する。LMSに関しては本学



注) LMSは、Learning Management Systemのこと

図 エルダー活動の将来構想イメージ

では kyonet という呼称の大学独自のネットワーク学習システムを利用して各科目の学習を展開させているが、初年次にはこれを使いこなすことは困難であろうと予測される。大学教育に重要な主体的な学びの姿勢や思考を伴う活動への参加を困難にしていることには、オンライン学修における基礎知識の不足があるとの指摘もある<sup>10)</sup>。したがって、初年次教育での支援方法には特段の工夫が必要である。

そして、3年生は2年生に対しての支援を行うが、看護教育では2年生から必修専門科目における学習内容が深まり、科目の中での課題も増え、自己学習時間が増大する。著者らの体験として、複数の課題を抱えて自己学習していくことの困難さでつまづく学生が多い。よって、ここでの支援に期待するのは自学マネジメントに関して、である。また2年生は2週間にわたる基礎看護学実習Ⅱを履修することから、臨床をイメージできるような先輩からの助言は有効であろうと考える。

次に4年生が3年生に対して、である。3年生では各科目での演習形式授業が増え、グループワークも複数展開されることから、そこで実際の技術演習や紙上事例を展開するためのサポート、さらに3年生後期から開始する領域別実習は長期にわたり、臨地での実習が展開されることから学生らの期待と不安は非常に高まる。先輩からの助言は何よりも心強いものと予測できる。実習中の生活をどのように送るのか、先輩の体験を聞く機会はとても貴重なものとなるであろう。

本活動の構想は、学部学生にとどまらない。卒業生が4年生に対して、就職や国家試験の体験、あるいは新人看護師として勤務する体験を語り、共有することは卒業年の4年生にとって、自分の将来を思い描く機会となり得る。

## V 今後の課題

本活動では先輩にあたる支援者をエルダーと称している。エルダーとラーニング・アシスタントとの違いは何か、その違いを明確にする必要がある。そして、エルダーへの報酬をどのように考えるのか、報酬を与えるとすればその費用の確保をどうするのか、雇用体制といった、学部を超えた、大学側との折衝も必要である。

またエルダー学生の個人差の問題もある<sup>6)</sup>。

よって、エルダーの条件、募集方法や、エルダーの質を担保するための研修やサポート体制を整備することは早急な問題でもある。そういった本活動のルール作りや本活動の評価方法も考えていく必要がある。

さらに、現在は有志教員組織で始めた活動であるが、全学部内に周知した教育としていくためには、この活動を教育の一環としてシステム化<sup>6)</sup>し、教育に組み込む方法も準備する必要がある。

## VI おわりに

本活動はまだ緒についたばかりで、課題に示したような問題点も多い。本活動を学部内、大学内に周知し、より良い方向に向かうような御助言をいただければと願っている。

### 【引用文献】

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構, 平成30年度学生生活調査結果, 2020年.
- 2) 大阪産業大学: 学内エルダー育成プロジェクト, <http://www.osu-koyukai.net/jimukyoku/2012/05/post-120.html> (2021年10月29日アクセス)
- 3) 関西学院大学, 2019年度主な活動 エルダー, <https://www.andrew.ac.jp/faculty/management/topics/> (2021年10月29日アクセス)
- 4) 谷村千華, 野口佳美, 酒井知恵子: 屋根瓦式教育システム型実習前訓練における“教える側”学生への効果, 看護教育, 56 (4), 334-340, 2015.
- 5) ケニヨン充子, 三里久美子, 岸田泰子: ピアエデュケーション手法を用いた母性看護学演習のピアエデュケーターへの教育効果, 共立女子大学看護学雑誌, 7, 13-22, 2020.
- 6) 池口佳子, 五十嵐ゆかり, 三浦友理子: 聖路加国際大学看護学部におけるLA (Learning Assistant) システムの創設, 看護教育, 59 (4), 302-306, 2018.
- 7) 同志社女子大学: ビッグシスター制度, [https://www.dwc.doshisha.ac.jp/current/support\\_system/big\\_sister](https://www.dwc.doshisha.ac.jp/current/support_system/big_sister) (2021年10月29日アクセス)
- 8) 川瀬初江, 山本喜美江, 新しい時代の新人教育システム エルダー支援システム, 看護管理, 11 (3), 189-195, 2001.
- 9) 共立女子大学・短期大学: 全学共通教育 人材育成目的とカリキュラムポリシー, <https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/academics/culture/purpose/> (2021年10月29日アクセス)
- 10) 鈴木広子, 初年次学生の学び方における課題—学習者調査の分析から, 東海大学教育開発研究センター紀要4, 53-64, 2019.